平成２７年度

小金井平和の日記念行事

「戦争体験談集」

小金井市

は　じ　め　に

現在、本市では、先の大戦において犠牲となられた方々を悼み、恒久平和を祈念して小金井市戦争犠牲者追悼式を３年ごとに行っています。昭和２８年には、戦争による犠牲者の霊を慰めるとともに戦争の惨禍を忘れず、再びかかる不幸を繰り返すことのないよう、私たちの平和を祈念する記念碑として小金井町戦争犠牲者慰霊碑を建設し、同年１２月２０日には、その除幕式及び慰霊祭を行いました。また、平和に関する宣言として、昭和３５年１０月３日には、地方自治体が平和の尊さを訴え、世界連邦運動に賛同を表する「世界連邦平和都市宣言」を行い、昭和５７年４月１日には、世界の唯一の核被爆国として、また、平和憲法の精神からも、核兵器の全面廃絶と軍備縮小の推進に積極的な役割を果たすべきとして「小金井市非核平和都市宣言」を小金井市議会において行っています。そして、昭和５４年３月２０日に制定された「小金井市市民憲章」の中でも、平和を願う市民の強い思いを示しているところです。

本市ではこれまで、平和都市として未来の子どもたちに平和な世界を継承していくために、戦争の悲惨さと、平和の大切さを発信し続けていくことが必要であると考え、「非核平和映画会」、「平和行事参加の旅」、「原爆パネル展」、「平和講演会」など、様々な平和事業を継続して展開してきました。また、「日本非核宣言自治体協議会」及び「平和市長会議」にそれぞれ加入するなど、平和を希求する自治体としての姿勢も示しているところです。

そして、平成２６年１２月１８日に戦後７０年の節目を迎えるに当たり戦争の記憶を風化させないため、改めて平和の大切さや命の尊さを語り合い、考える機会をつくるため、「小金井平和の日条例」を制定しました。

この文集は、同条例に基づき実施する平和の日記念行事における戦争体験談の発表者を募集した際、応募のあった体験談すべてについて取りまとめ、冊子にしたものです。ご覧いただき、未来の子どもたちに平和を引き継いでいくため、共に「平和」について考える機会にしていただければ幸いです。

平成２８年　３月３１日

企画財政部広報秘書課

目　次

【発表者】

昭和２０年３月１０日の東京大空襲で家族を亡くして
塩路　耕次（８０歳代　男性）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１

国民学校一年生の見た戦時下の暮らし
千村　裕子（７０歳代　女性）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８

【応募者】

私の１４歳の頃の戦争の記録
外村　泰子（８０歳代　女性）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６

戦争体験談
小林　一雄（８０歳代　男性）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８

空襲体験談
横田　満男（８０歳代　男性）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２１

戦争体験談
田中　利徳（８０歳代　男性）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２７

集団学童疎開の経験
浅野　幸雄（８０歳代　男性）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２９

長崎での原爆体験（戦後７０年を振り返る）
畑島　喜久生（８０歳代　男性）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３３

昭和２０年３月１０日の東京大空襲で家族を亡くして

塩路　耕次（８０歳代　男性）

私は、「戦争体験者」といっても、被害者の立場でのお話をいたします。

私は、昭和２０年（１９４５年）３月１０日の「東京大空襲」で家族を亡くしました。

ただ、本当はお話したくない。私にとってあまりにつらい思い出なので、家族にぽつり・ぽつり当日の様子を具体的に話しだしたのは、７０歳を過ぎてからでありました。３０年近く勤めた職場でもその後の職場でも、誰１人にも話してきませんでした。

しかし、私もこの１月に８４歳になりました。戦争体験者が少なくなってきている。黙っていては伝わらない。そこで、私も思い切って、皆さんの前でお話をする決心をいたしました。

私は、いまから７１年前の昭和２０年３月９日の深夜から１０日の未明にかけてのアメリカ軍のＢ２９という大型爆撃機による「東京大空襲」で家族４人を亡くし、私一人が取り残されることになりました。

昭和７年（１９３２年）１月生まれの私は、当時旧制の都立中学校の１年生で満１３歳でした。当時５６歳の父、４７歳の母、旧制の高等商業学校２年生で２０歳の兄、国民学校（いまの小学校）４年生で９歳の妹の４人の家族と突然永遠の別れをしなければならなくなりました。

東京大空襲で東京の中心部の広い範囲が焼け野原になったといっても、想像がつかない方が多いと思いますが、鉄筋コンクリート造りだった国民学校、警察署、少しの民間ビルなどの焼けビルが点在する以外は、本当に野原のようにまっ平らになってしまいました。住宅も商店もほとんどは木造建築物で容易に焼き払われてしまったのです。この日、焼夷弾による爆撃で約１０万人の人が亡くなったといわれています。

私が住んでいたのは、この多摩地域からみると東京の東部で、いまの中央区日本橋、当時の日本橋区の浜町１丁目というところです。現在は、都営地下鉄新宿線で「馬喰横山」の次に「浜町」という駅があります。隅田川に接した下町です。

「浜町」駅の地上に出ますと、あとでお話しする「明治座」という立派なお芝居の劇場があります。

日本は、昭和１２年（１９３７年）から中国と「日中戦争」を戦っていたのですが、さらに、私が国民学校４年生だった昭和１６年（１９４１年）１２月８日には、アメ

リカ、イギリス、オランダなど「連合国」を相手に宣戦布告し、「太平洋戦争」を始めました。はじめのうちは真珠湾攻撃などで戦果をあげていたのですが、アメリカ軍にだんだん攻め込まれて、昭和１９年（１９４４年）７月にはサイパン島がアメリカ軍の手に落ちました。そして、アメリカ軍の超大型のＢ２９爆撃機が東京に飛んでこられるようになり、東京空襲が現実味を帯びてきました。

東京への空襲は、昭和１９年の１１月下旬から３０数回あったのですが、比較的小規模で、被害もそれほど大きくありませんでした。

私の家族はみんなのんびりとした気持ちで生活していました。両国橋を渡っていまの墨田区にある中学校に徒歩で通っていた私は、Ｂ２９が１機青空高く飛行機雲の尾を引いて飛んでいるのを見て美しいなと思ったりしていたくらいでした。妹は、１回１人だけで知り合いの農家に預けられ、疎開したのですが、なじめなくて１か月くらいで帰ってきてしまいました。

昭和２０年３月９日の夜は本当に真っ暗な夜でした。夜遅く警戒警報が１０時３０分に鳴り、それがいったん解除されてからしばらくして突然数多くの、超大型のＢ２９爆撃機の轟音が鳴り響きました。かなり超低空という感じでした。地響きがするくらいに思えましたが、後で調べるとサイパンなどのマリアナ諸島から房総半島を経由して、３２５機が高度２０００ｍくらいで襲ってきたということでした。０時７分に爆撃が開始され、空襲警報が出されたのは、爆撃が開始された８分後の０時１５分だったようです。

この日の空襲の主だった爆撃対象は本所、深川、浅草など隅田川の東側の各区と、隅田川の西側の、私たちの住む日本橋区の一部で、アメリカ軍に「焼夷第一地区」と名づけられていて、いわゆる「じゅうたん爆撃」によって住民を狙いうちにした無差別爆撃でした。

３月９日の夜、真っ暗闇のなか私たち家族は、父母をはじめ５人が立ったまま話し合い「いよいよこれは逃げるより仕方がなさそうだ」ということになったのですが、父は「自分は家を護る」といって自宅に残りました。私の家は「金座通り」（いまは「清洲橋通り」という名前に変わっています）から４～５軒入ったところでした。母と兄、妹と私の４人はリアカーに荷物を積んで家を出ました。しかし、これは２０ｍほどのところ、金座通りの手前ですぐ放棄しました。父のその後の行方は分からないままです。

いま考えると、「お父さん一緒に逃げましょう」と声をかけなかったことが悔やまれます。そのころ、戸主は、自宅を守るべきだという軍の通達が出ていたのだという話をテレビで比較的最近みておりますが。

焼夷弾は六角形の筒状の長さ５０cm くらいの油脂焼夷弾（ゼリー状の油が入っている）などで、数十本をひとつの束にした「クラスター爆弾」と呼ばれるもので、飛行機から落とされて途中、空中でばらばらになって落ちてきます。私の家の近くには落ちませんでしたが、周りに落ちて起きた火災に囲まれる形で逃げ場を失いました。焼夷弾は戦略地図上の升目の交点に落とされ、周りからの火で追われることになります。

母、兄、妹と私の４人で金座通りに出て、最初は右手の浅草橋方向に向かって逃げようとしたのですが、浅草橋のあたりは煙が上がっていて、もうかなり燃え上がっているように見えました。

これは無理だということになって、逆の左方向に向かって歩き出しました。少し先の交差点で右の人形町方向に金座通りを渡ったのですが、右側の久松消防署の前で、消防自動車が２台、歩道から乗り出すような形で燃え上がっていました。「ああこれではこっちの方向も駄目だ」ということになり、もう１回、もとの交差点を左側に戻り、交差点を明治座方向に渡って、明治座の前の歩道を明治座の方に向かって歩き出しました。

明治座の前の歩道には、いつの間にかどこから集まったのか、歩道の幅一杯に大勢の人がいて押すな押すなといった感じでした。この頃、まだ歩道沿いの家々は燃えておらず、火の粉が降ったりということもありませんでした。

４人は手を繋いで歩き出したのですが、少し行った小鳥屋の前で、繋いでいた私の手が家族の手(多分、母の手)から離れてしまいました。ほんの一瞬のことでした。その時点では、大勢の人びとが前へ前へと向かって押し進んでいく感じで、私は、その集団の中に巻き込まれて家族から遅れてしまい、あっという間に母たちの姿を見失ってしまいました。

大勢の人たちの人波の流れのなかで押し流されて、私はこの人たちと一緒に「明治座」という劇場の建物に正面入り口（当時は金座通り側に入り口がありました）から入りました。私は、１階正面入り口からすぐ左手にある廊下の奥の角（すみ）まで行って座り込みました。ちょうど明治座の外壁・興行看板(役者絵)の裏側あたりだったと思います。私以外、数人の大人がかたまって車座の形で座っている中に座っていました。あとで思うと１階廊下にいて、地下に降りたり、観客席に行ったりしなかったのが命拾いできた一因でした。

しばらくすると、だんだん煙が充満しだしました。タオルで口をふさがないと息が苦しい(タオルを持っていてよかった)。そのうち、どこからかバケツの底のほうに水が

少し入ったものが廻されてきました。タオルにその水をしみ込ませて口にあてて苦しくなるのを防ぎました。

その場所は薄暗くて、誰の顔も見えませんでしたが、そうかといって真っ暗でもなく、うっすらと明るかったように思います。人数は７～８人程度だったと思います。

どのくらい時間が経ったか分かりませんが、しばらくして、男の甲高い声で、「緞帳（どんちょう）に火がついたぞー」と叫ぶのが聞こえてきました（緞帳というのは舞台に下がっている幕のことです）。私は、この声を聞いて、このままここにいては駄目だと思いました。そこで、立ち上がって、うずくまっている誰かの肩をまたいで廊下を戻り、入ってきたのと同じ正面入り口に向かい、そこから外に出ました。

今にして思えば、この時の一瞬の判断のおかげで命が助かったのだと思います。このとき立ち上がっていなければ助からなかったと思います。他に立ち上がった人はいませんでした。

明治座の正面入り口の前の道路の真ん中に安全地帯がありました。金座通りは自動車道路なのですが、道幅が広く「１８間道路」と呼ばれていたくらいでしたので、横断歩道の途中、中央部分に歩行者用の安全地帯がありました。都電の停留所と同じように細長い形で、両端に婉曲した囲いが造られていました。ちょうどうずくまり、身をかがめると隠れられるくらいの高さです。その囲いのうち、北側の浅草橋側にうずくまって朝まで何時間か過ごしました。長い時間でした。他に誰もおらず、まったく１人だけでした。

明治座の入り口を出て、安全地帯に渡ってすぐ後ろを振り返ると、女の人が出てきました。その人の背中にぱっと火がついて燃え上り倒れそうになって、入り口全体が明るくなったのを見たような気がします。幻影だったと思いたいところなのですが。

安全地帯に座っていますと、浅草橋方面、すなわち北の方向から無数の焼けトタン板がびゅーん・びゅーんと音を立てて、次から次へと、ものすごい勢いで頭上をひっきりなしに飛んでいきます。防空頭巾をかぶっていましたので耐えられましたが、首をすくめてやり過ごすしかなく、大変長い時間に感じました。

当夜の強風の上に、火事で風が起きたのかもしれません。兄のお下がりの厚手の学生オーバーも役立ちました。その頃の木造家屋には外壁や屋根にトタン板がたくさん使われていて、それが飛んできたのです。防空頭巾をかぶっていたお蔭で、首筋に火の粉が一つついただけで、やけどをせずにすみました。安全地帯の囲いは防御壁になってくれました。

そのうち、明治座とは道路を挟んで向かい側に並んでいた３階建てのいくつかの建

物が燃え上がりだしました。ぼんぼんと音がしてすごい勢いで燃え上がります。その様子はいまでも眼に焼きついています。これは非常に怖いものでした。熱さもかなり熱かったように思います。じっと耐える以外なく、かなり時間がたってから建物が焼け落ちて勢いが弱まったときはほっとしました。

内部が燃えたのに、明治座の建物の外壁は、幸い焼け崩れませんでした。こちら側も燃えていたら、助からなかっただろうと思います。安全地帯にうずくまっていた時間はとても長い時間でしたが、朝が白み始めたときはやっと安堵の気持ちになりました。

先ず、わが家のあった場所に戻ってみました。裏にあるお蔵は無事のようでしたが、わが家のところはまっ平になっていて、父の商売であった印刷業の廃業前に買い込んであった印刷用紙が灰になって、積み上げた用紙の形のままに残っていたのだけが眼につきました。

私の母、兄、妹も、私同様人の流れに押されて明治座に入ったものと思っています。いつかは戻ってきてくれるものと期待しましたが、どこから現われることもなく、むなしい期待でした。自宅に残った父とともに「戦災死」として扱われました。

明治座に入った人々のほとんどは亡くなったようで、亡くなった人たちの人数は千数百人ともいわれます。しかし、混乱状態で確かな人数は分かりません。明治座はその頃としては数少ない鉄筋コンクリート造りの頑丈な建物でしたので、安全な避難場所として推奨されていたようです。ごく少数、幸運にも私のように出入り口やあるいは窓から外に出て助かった人たちもいるようです。

明治座横（現在の正面入り口側）の遊歩道の片隅には明治座のなかで亡くなった空襲犠牲者を悼んで建てられた小さな観音堂があります。

また、３月１０日には毎年、東京都内であったすべての空襲で犠牲となった人びとを悼む慰霊の法要が東京都の主催で，両国横網にある慰霊堂で開催されております。この慰霊堂の敷地には、「東京空襲犠牲者を追悼し平和を祈念する碑」が造られ、碑の内部には、亡くなった人たち一人一人のお名前を墨で書いた和綴じの「東京空襲犠牲者名簿」が安置されております。

明治座の裏手には、「浜町公園」という大きな公園があった（いまもあります）のですが、そのころ陸軍の高射砲陣地になっており、立ち入り禁止で避難民は入れませんでした。明治座の窓から出て、公園近くの防空壕に入って助かった人はいるようです。

久松国民学校は、立派な鉄筋の校舎で、安全な避難場所と考えられ避難民が入りま

したが、校舎内や校庭で多くの人びとが亡くなりました。浜町国民学校でも多くの人びとが亡くなりました。

久松警察署では、最初のうち避難民を中に入れなかったのですが、途中から中に入れたようで、多くの人が助かりました。警察署は焼けなかったのです。

久松国民学校で私と同学年では、約１６０人の生徒のうち、６人が亡くなりました。

中学校の同学年では、約３００人の学生のうち、２３人が亡くなりました。爆撃の一番激しかった本所、深川、浅草などに住んでいた学生が多かったのです。中学１年の同じクラスで仲良しだった浅草に住んでいた秀才の友人も亡くなりました。

日本橋と本所、深川、浅草の間を流れる大きな隅田川の川面や両岸、そして言問橋、新大橋など多くの橋の上での犠牲者の数はおびただしいものだったようです。浅草の観音様の近く言問橋のたもとには犠牲者を悼む碑が建てられております。

この日の東京大空襲のあと、終戦の８月１５日までの間に、東京も何回も空襲を受けたほか、大阪、名古屋、神戸などの大都市、それに中小都市も含めて日本国中のほとんどの都市がアメリカ軍の空襲で焼き払われました。

いろいろの偶然に助けられて一人生き延びた私は、埼玉県の栗橋から利根川を越えたところにある知り合いの農家で１か月間ほどお世話になった後、母の一番上の姉である伯母と連れ合いの伯父に引き取られ、伯父の商売の呉服屋の手伝いをしながら中学校に通い、高校、大学まで卒業しました。

そして、社会人となり、結婚して二人の子供に恵まれ、二人とも立派な社会人として活躍してくれています。また、二人の孫が頻繁に遊びにきてくれて幸せな毎日を送っております。

自分たちも同じ日の空襲で罹災して住宅をかねた呉服の店を失い、苦しい生活のなか、他の親戚が見向きもしなかったなかで、私を引き取って育ててくださった、当時既に７０歳を過ぎて高齢であった伯父伯母に心から感謝しております。中学校、高等学校、大学と進学、卒業して社会人となることができました。

中学校のクラス担任で数学の祥雲先生には頻繁に私を自宅に呼んでいただき、小さいお子さんたちとご一緒に食事をご馳走になりました。このような先生の励ましがなければ、私は立ち直ることができなかったと思っています。私が今日まで生きてこられたのは先生のお蔭です。中学の友人たちも折に触れて声をかけ励ましてくれました。先生は２年ほど前、９７歳で天寿を全うされました。

今日の平和な日本で、戦争の悲惨な現実はなかなか感じとりにくいとは思いますが、私の願いとしては、国家の間での紛争は、絶対に「戦争」という、小さい小競り合い

から始まっても、いったん始めてしまうと人と人が際限なく殺しあうことになる、このような手段に訴えることなく、粘り強い「外交交渉」で解決すべきだということです。私たちも頑張らなければいけませんが、７０年間続いてきた平和を皆さん、特に若い皆さんのお力で護りきっていただきたいと思っています。

以上で、私のお話を終わります。
お聞き頂き有り難うございました。

〔参考〕「東京大空襲・戦災誌：都民の空襲体験記録集」第１巻―第５巻
１９７３年３月１０日発行。財団法人「東京空襲を記録する会」

国民学校１年生の見た戦時下の暮らし

千村　裕子（７０歳代　女性）

私は国民学校１年生のとき、終戦になりました。国民学校１年生は、今の小学校１年生ですから８歳ですね。自分の記憶としては７歳からがちゃんと思い出せることなので、もうそのときはもちろん戦争がありました。それで私の話すタイトルは、「国民学校１年生が見た戦時下の暮らし」。戦争というと、昔の歴史のドラマなんか見ると敵と味方が前線で鉄砲や槍で戦う、そこが戦場であり、戦争であると思うのですが、だからそこに関係なければ、戦争はもう自分に関係ないというふうに思いがちなのですが、実はそこの戦争に出ている人たちのうしろには、両親もいるし子どももいるかもしれないし親戚もいるかもしれない。それで鉄砲を撃ったり、槍を投げたりそういう人たちのうしろを「銃後」といって、私たちは「銃後の人たち」と言われていました。それで私はずっと「じゅうご」って、１５歳のことかなと思っていたのですが、ずっと後になって銃の後ろにはたくさんの身内の人が続いているのだと、そしてその人たちはいわゆる普通の市民なんだということで、もちろん幼稚園の生徒も小学校の生徒もみんな戦争があるならば戦争に関わっているということを言っていると思うのです。

色々な思い出があるのですが、今言ったように幼稚園の時からの思い出を一つだけ憶えていて、幼稚園に入園した時に仏教幼稚園だったのでお釈迦様の盛大なお祭りがありました。母と行ったのですが、お釈迦様に供えて甘茶をかけて、そしてお供えした物が、なんとそれでも嬉しかったのですが、小指ぐらいのさつまいもの茹でた物が４、５本でした。それでも母はもっと欲しいから、みんなの中に入っていって母の凄まじい姿、さつまいもの小指くらいのを１本でも多く取ろうとしている母の凄まじい姿が今、一番最初の戦争の時の思い出となるのです。このようにもう食べる物がまったくありませんでした、まったくないのですよ、何もないのです。配給というのがあって配給はその家の家族の人にカードが来て、それを見せて配給を取りに行きました。何が配給されたか今私が思い出すままに書くとしたら卵の黄身、茹でた卵の黄身が粉になったもの。さつまいものつるを５センチぐらいに切って干したもの。葉っぱはありません。葉っぱは食べたいけれど、もっと偉い人しかないと言われていました。みかんの皮、みかんの皮は刻んで、豆のかすのおからの干したのも配給になったのでそれと混ぜて食べました。

そして実は私は東京に住んでいたのではなく、新潟市にいました。地方にいたので

す。新潟というのは佐渡の向かいですからお魚もいっぱい獲れるし、お米、なんといっても越後平野が連なっている米所です。けれど幼稚園の時、お米なんか見たことがありませんでした。けれど、そこからたくさんのお米が船で運ばれて、戦地に行ったり色んな所に行くので、そのお米の船が沈没するのです。たくさん沈没した船の中のお米が海の底に貯まるので、それをさらって持ってきて配給になりました。「濡れ米」といいました。濡れ米はずっと海の底にあった場合もあるし、１週間だけあった場合もあるのでしょうけれど、皆さんご飯を炊く時に１日も２日も水に浸けたお米はてんでもうご飯としては成り立たないように、海水に１週間も１０日もそれ以上浸かったお米がどんなにたくさん配給になっても、それは本当に食べられる代物ではありませんが、食べなければ食べ物がなかった。それをどのように保管したかといいますと、大量に配給になるので、畳を上げるのですね。底の板が出てきます。そこに藁で作ったむしろ、昔乞食が座っていたむしろみたいなそういうのを敷いてそこに濡れ米を広げます。夏ですとすっぱい匂いが立ち昇ってきますが、唯一の食べ物ですから、やっぱり大事にして食べました。私は名前は「ひろこ」というのですが、あだ名は「ひょろこ」でした。今思うと小学校にあがったときも体重２２キロでしたので、今２２キロの１年生なんているかなと思いますが、「ひょろこ」ってずっと中学くらいまでのあだ名でした。そしてもちろんお味噌やお醤油やお塩はありません。お塩は食べないと生きていけないからほんの少し配給になりました。お塩の配給取りに行きました。けれどそんなものじゃとても足りません。私の家は７人家族でした。子どもが３人に、母と父と祖母と、それからまだ結婚しない父の妹がいました。あとになって戦争が終わってすぐにもう一人妹が生まれたのですが、その７人を養うにはとても大変だったのです。そして、要するに燃料なんてありません。ガスなんか今は点ければパチッとつく、電気を点ければ電気のヒーターが何か煮たりできる、そういったものは一切ありません。何が燃料だったかというと「亜炭」というものをご存知ないかどうか分かりませんが、石炭になる石炭という素晴らしい黒いダイヤモンド、あれは土の中に大昔、何千万年前の昔、木が埋もれて化学変化して石炭という黒いダイヤモンドみたいになって、それを燃やすとすごい火力が出るわけです。そこになる途中の「亜炭」、それが配給になるのですが、もう全然火がつかないし、くすぶるし、いぶるし、もうあれで火を起こすということは至難の技でした。台所に張り付くようにして皆で必死で火を育てるって感じでした。そしてマッチなんかは配給ですからもったいないですから、マッチは宝物ですから、シュッシュと擦れません。そこではがきを切って縦に１０枚くらいに切って硫黄を溶かしてそれを塗って、付け木というのをつくってそこに

火をつけてマッチが１個失敗しても少し付け木に火をつけてそれを使っていました。けれど、囲炉裏でもないですから次の日お料理する時は付け木は使えませんからマッチをまた使うわけですね。そしてこのように煮炊きも大変でしたし、なによりもお米もない、濡れ米であるし、お魚なんて見たこともない。新潟は今は鮭が素晴らしい塩引きというのが村上というところに採れるのですが、子ども時代に鮭なんて見たこともありませんでした。見たのは鮫、鮫が配給になりました。鱈が配給になりました。鱈って今、鱈なんか鍋に使うけれども、昔、鱈にしらみがいて、そのしらみって、寄生虫なのです、そんなのを食べていました。

そして祖母と海水を汲みに行きました。一升瓶を子どもも１本持って、祖母も１本持って私と弟と、妹は３才くらいでしたから、３本、海水を汲んできます。そして帰り道に松林を通るのですが、松の葉が落ちて枯れています。松の葉は皆さんご存知かと思うけれど、普通の植物の葉っぱと違って針ですね。しかも緑のうちは弾力性があって柔らかいのだけれど、枯れてしまうと全部針です。けれどそれを祖母は大風呂敷に包んで、その上に３才の妹をおぶうのです。松の針が刺さるので、痛い、痛いというのですがそのうち慣れるのですね。でもしばらくして裏返しにしておぶうのです。そうすると今度は、背中が痛い、痛いと。そういうふうにして海岸から家までは３キロぐらいあったかな、そこに一升瓶を持って、そして松を持って帰ってきて、一升瓶の塩水はお味噌汁といっても味噌はありませんから、野菜もありませんから、配給になった変なものの、変なみかんの皮とか、さつまいものつるをふやかしたようなものを食べて、子どもは泣いていました、いつも泣いていました。そしてお腹が悪くなるのです。いつもおいしい物が食べたいと言っていました。それでそこら中のお庭は畑になるのですが、実は私の父は小学校の教員でした。母も教員でしたので、いつも生活の中には父も母も学校に行っているのでいませんでした。父は教員でしたから、戦争に行かなかった点は良かったのですが、とても貧乏な生活をしました。庭を畑にして慣れない畑仕事をするのですが父は鍬で足の指に怪我をしたり、すごく能率の悪いことをしてかぼちゃなんか育てていて、育てるなんて言っても肥料なんかないのですよ。あの時の肥料はなんと柄の長いひしゃくでボッチャンとトイレから汲んで、お水を足してかき混ぜてそれを撒くのです。それでかぼちゃが育って、「ああ、もうじき収穫できるな。」と思うと必ず盗まれるのです。自分たちが作った野菜を食べたことはありません、盗まれるのです。じゃあ早めに採るかというとそんな早めのものは美味しくないので今度は大丈夫と期待するわけです。

そんなふうに食べる物がないので、祖母はリュックを担いで買出しに行きました。

越後線の列車の屋根までみんなが乗るのです。屋根どころかドアなんか閉まらない、窓にみんなくっ付いて、そして祖母は買出しから帰ってきてほんのちょっとだけじゃがいもだか玉ねぎだか買ってきて、列車の屋根から飛び降りて骨を折って歩けなくなってしまいました。祖母のことが本当に可哀想で私たち子どもながらに、今考えると６０歳になったばかりぐらいかな、５０代の終わりかな、そんな祖母のことを思うとね、本当に涙が出ます。

そして母は自分の着物を３、４枚持って、たたんで大風呂敷に包んで担ぐとすごい重い、１枚でも重いのですよ。それで３、４枚持っていって１０里の道を歩きました。１０里って、その頃母は１０里だというのですが１里が４キロでしたから、４０キロ、マラソンコースくらいかなと私は思うのですが、小学校１年生でそれを朝早く暗いうちに起きて歩きました。靴なんかないのですよ。靴なんか売ってないのです。何を履いたかというと長靴を下のほうだけ切ったようなゴム短靴というのが売っていて、それを履くのです。母たちは下駄でした。下駄の鼻緒というのもないですから、自分で縫って履いたのですね。それでその短靴に靴下なんかありませんから、がばがば裸足で履いてとうとう私は４０キロの道を短靴を履いて、靴擦れが出来て、そして帰ってきてからその靴擦れが膿んでしまいました。薬なんか全く売っていません。薬屋さんもありません。どうしたかというと、どくだみの葉を取ってきて洗って、それをいちじくの葉っぱに包んでしっかり針金で縛ってお風呂を焚くとき、お風呂といったって今みたいにガスをつけてシュッと焚くのではなくて、薪なんかないのです。大工さんの所から鋸で引いた木屑をもらってきてそれに火をつけるのですよ。考えられないですね。くすぶって、いぶってお風呂の番は涙しながらだったのですけれど、そこに入れるのです。そうするといちじくの葉が熱でもって中のどくだみを溶かします。しばらくしてそれを取り出して中を見るとどくだみの葉がどろどろと練り薬みたいになります。今でも東城百合子先生という自然治癒の先生の本にはどくだみの葉が良く効くと書いてありますが、和紙を丸く切って、まん中に穴を開けてそこにどくだみのどろどろを塗って、靴擦れに貼るのです。けれど栄養も悪いし、ばい菌もそれでは取れないのでとうとう私は幼稚園は全部休みました。中学生になってからお友達に「どこの幼稚園だったの。」って、「〇〇幼稚園だったよ。」って、「あんたなんか見てないよ。」と言われました。それは私は本当にお釈迦様の日から数日しか幼稚園に行ってなかったので、幼稚園の中の友達は私を見ていなかったわけです。

そんなで食べる物が本当になかった、それでこの間、南小の学童のお父さんたちがさつまいもを作って、さつまいもの芋掘りをして、葉っぱと茎を捨てて山のように捨

てて行ったのです。今は肥料が良いですから葉っぱも茎もすごく繁っているので思わず近寄って、昔を思い出したら、用務主事さんがきて「それごみだよ。」と言われて、昔は食べたかったのにって感じでその場を離れたのですが、そんなような食べるものもない、そういう生活でした。本当に今思っても、戦後７０年なので記録を書いておこうと思って、夏にこれを書いていました。そしたら、お中元の贈答用のカタログが来ました。いくら、蟹、色々、ものすごく贅沢に見えました。今これを私が書いている時に、今配られているカタログのそれらは皆が買ったりして食べているのです。私はそれははっきり、買っていません、買いません。質素な暮らしというのをそれから戦後ずっと守って続けてきた、それが大切な戦争体験を活かすことだと思っています。贅沢な外国から取り寄せた帆立貝だか、なに蟹だかそういったものは食べません、一切食べません。平和というものを守るのだとしたら、そういうことだと私は思っています。

次に２番目として、生活の様子なのですが、生活の様子は時間の関係もあるので少し省略して話したいと思いますが、家にあったお鍋やお釜類、金属は全部、献納しました。献納って何かな、鍋や釜を班長さんに出すことなのだけれど、今日これを書いて、一応広辞苑を引いてみたら、献納というのはこの正しい意味はびっくりしました。献納、国家に金品を奉ること。奉ったんじゃないのですよ、班長が来て、「銅で作った釜、出しなさい。」、「この鍋は銅で出来ているから、出しなさい。これは鉄。」、ステンレスなんかありません。銅と鉄だけですから、ほとんど全部持っていかれてたった一つのお鍋で全てのことをしました。それを献納といいます。

それで私の家は全然贅沢でなかったけれど、贅沢な人たちはものすごい指輪だとかネックレスだとかそういったものを献納しました。だから班長の家に行くとダイヤの指輪とかサンゴの首飾りがざっと置いてあるのですね。子どもながらに見たこともない贅沢品にそこで触れました。そして生活の中で暮らしているうちにあちこちで空襲があって、次は新潟だと言われていたので、家族みんなで疎開しました。新潟はちょっとした小都会ですけれど、全員が疎開しました。７人の家族はリヤカーに、リヤカーというより大八車だったのです。お借りして、大八車って歴史ドラマに出てくる大きな車に死体を乗せてやっているあの大八車で、家族が６人疎開しました。私一人は祖母が預かりたいということで、新潟県新津市というところに一人だけ疎開して家族６人は大八車を引いて、白根というところの田舎に行きました。途中で日が暮れて野宿したそうです。野宿なんて考えてもみないことだったのに、野宿したそうです。まだ私が小学１年ですから、弟は私より２歳下です。妹はまたそれより２歳下ですから、

赤ん坊連れて大変だったと思います。そしてそんな所に疎開して私は祖母の家に疎開したのですが、祖母の家に疎開してＢ－２９は来ました。けれど、防空壕なんていう感覚はないので祖母はＢ－２９の警戒警報というのが鳴ると押入れに入るのです。それで行李の蓋開けて柳行李の中に入るのです。あんなことしても何にもならないのに、祖母は必ずＢ－２９の警戒警報のサイレンが鳴ると行李の中に入りました。今考えるととっても滑稽なのですけれどね。

祖母は子どもが６人いました。長女が私の母で、教員、長岡師範というところで教員になっていました。長男は戦争が終わる５年前に２０代で戦死しました。てつおさんというのですが。そして次男は大佐という役付きになって戦争に行っていました。そして三男と四男、つねおさんにとしろうさんという人が２０になったばかりなのですが、戦争が終わる１年前に三男が応召しました。応召っていっておじさんが応召したといって、なにかなと、これを書くにあたって広辞苑を引きました。そしたら、お召しに応ずるなのです。赤い紙が来たら、さっさと戦争に応召しました。そして応召したら出征しました。出征というのは敵に向かって戦いに行く。それでその三男は予科練に入っていたので途中でヴェトナム（仏印）というところから帰ってきて予科練のすごいかっこいい七つボタンで帰ってきて、おじさんすごいと思いました。二人のおじさんがお日様の差す縁側で寝転んで足の蹴りあいをしてるのですよ。２０になったばかりの少年に近い青年がまだ戦争に行かない時に、日の当たる縁側でふざけっこして取っ組み合って足でけっぽりあって、間もなくすぐ、戦死しました。それで次の四男ですが、四男は戦争が終わる年の６月ごろ応召しました。召されて出かけていきました。そして６月２０日に死にました。死ぬときは戦地に行く、外国の、どこか硫黄島のようなそういう戦地に行く予定でしたが、船も飛行機も無くて、港に待っている時に盲腸炎になって、盲腸が腹膜炎になって、治療の甲斐どころか、治療なんかできないというので「お母さん、お母さん、お腹が痛いよう。」と言って死んだと友人からあとで祖母が聞きました。人の死に方が犬死なんていう言い方は本当に失礼でもあり、そんな言い方はしたくないのですが、もう８月に戦争が終わるのに６月に応召されて、出征してそして船を待っている間に腹膜炎で手術もされないで死んでしまったおじのことを思うと、私はこれに応募する原稿を書いて涙が出ました。犬死なんて言葉はしたくないけれども、ですから祖母の４人の男の子のうち、長男はさっさと戦争で死にました。この間戸籍謄本を取り寄せて一体何歳で死んだのだろうかということを調べましたら、ほとんどみんな２４歳とか２３歳でした。それで次男は大佐になっていたのでどこかに行っていました。三男と四男はそういうわけで死にました。そし

て母の一番下の妹は長岡女子師範の生徒でしたが、富山県に軍事工場があって、そこに風船爆弾というのを作りに行って、毎日風船爆弾を作っていたのですが、戦争が終わる間際には材料がなんにもなくなって、毎日ねじを整理していたそうです。大きいねじ小さいねじを並べ替えるだけの仕事だったというのですよ。でも別に元気で戦争が終わったら帰ってきましたが、全く勉強をしない師範学校生徒だったので、それから小学校の先生になる自信がないとか色々なことがありました。そしていよいよ８月の１５日、終戦ということで、天皇陛下のお言葉、玉音放送があるということでした。なんのこっちゃわかりませんでしたが玉音放送の日が来ました。その前の日に二つの戦死の報せと骨壷が来ました。骨壷は一つでした。一つは来ませんでした。なんと戦死した三男四男の、四男は６月ごろ応召して６月にもう既に亡くなったのですが、三男はその前の年に死んでいたのに、二人の死の報せが終戦の前の日に届きました。そして新潟の新津というところでは「門牌」というものを立てます。人の背丈ぐらいの立て札を立てます。そこに「何々何々夫何歳」と書いて、そして近寄れないように柵を作ります。それが二つ立ちました、終戦の日に。私は、うろうろしたいました。母は別な所に疎開していますから来れません。車なんかもないわけですし、列車もろくに走っていない時でした。そして玉音放送が始まる時には、お隣の家に立派なラジオがあったのでそこに２０人ぐらいの人が集まって、天皇の声を聞いてほとんどの人がそこに泣き崩れました。私は小学１年生でしたから、なんのことか分からずに母もいないし、父もいません。おじたちも一人もいません。ぐるぐる回って時間の来るのを過ごしていて、そしていよいよ納骨でお墓に行きました。お墓に行って骨壷が一つ届いていました。もう一つの骨壷は来ていません。いよいよ納骨になって骨壷を開けたら、中から出てきたのは黒い石ころでした。ころっと一つ、骨じゃないのです。石ころでした。そして祖母はその石ころをお墓に埋めるのが耐えられなくて、もう石ころを取って頬ずりしたり、舐めたり抱いたり、もう和尚さんがもうやめなさい、もうおしまいと言ってもその石ころを抱きしめて、自分の四男の骨と思って抱きしめて離さなかった、それがもう忘れられません。そして祖母はお墓を建てるときに、どのお墓も全部同じ方向を向いて建っているのに、自分の家のお墓だけは自分の家の方を見るように建てました。だから今私お墓参りに行くと、たくさんあるお墓の中で向きがおかしな一つを探せば、それが祖母が建てたお墓なのです。変な方を向いてしかも高々と建っています。だから自分の家を自分の子どもたちが見ているというふうな気持ちになったのだと思います。

　そのように戦争の体験も話せばきりが無いほどありますが、私はおじたちが、おじ

といったって少年の続きみたいな青年たちでしたが、おじというとおじさんみたいだけど、そうじゃなくて若い人たちでした。その人たちが何歳で亡くなったのだろうかということを知る為に戸籍謄本を、まだ長男の奥さんが生きているので、取り寄せてもらって見ました。皆２０代半ば、あるいは２０になったばかりに死にました。それでその時はなんだおじさんが死んだのだ位に思っていました、小学生ですから。でも祖母の年になってきたとき、祖母の年を越えてきたとき、３年ぐらいの間で３人も息子が死んで、４人息子がいるうち３人が戦争でわけが分からない死に方をして、どこで死んだかも骨もないような死に方をしました。今一人の息子を交通事故で失ったりしても、あれだけテレビなんかで悲しむ親の姿を見て、祖母が３年間で本当に少年みたいな息子を、３人失ってしまったその心中ってどうだったのだろうかと思ってそのことがすごく気になりました。それで知っている人を訪ねますが、祖母の年令の人はほとんど生きていません。それで知る限りの人に聞いたら、三男はオリンピックに出たいといってスポーツに励んでいたというのですよ。でもオリンピックは実際行われなかったのですが、スポーツ青年だった。四男は国鉄に勤めて、お母さんを日本中に案内したいというのが夢だったというのです。それで祖母はずっと「三橋美智也」の「夕焼けとんび」というレコードをかけて息子を偲んでいたのですね。

本当にその心の中はどうであったか、これはこれからの私の課題であり、その３人の戦死した子ども達を思っている祖母がどう生きたかというのが全ての私のまとめの中のこれからの課題として残っています。

以上が私の戦時体験ですが、もっと語りたいことがいっぱいあるのですが、また書くことによって伝えていきたいなと思います。どうも聞いていただいてありがとうございました。

ひとつ、ごめんなさい、千人針ね。私寅年なので、寅年の人は千人針で忙しかったのです。寅は千里を駆けて千里を帰ってくる、どこまで行っても千里を帰ってくるというので寅年の人は千人針を作りました。母も寅年、おばも寅年なのでいつもさらしの布がたくさん来ました。そこに自分の年だけ赤い糸で丸を作ってこれを巻いて行ったのだけれど、こんなものなんにも効きませんでした、巻いていった人たちは死にました。千人針というのがあったことを憶えていていただきたいと思います。

私の１４歳の頃の戦争の記録

外村　泰子（８０歳代　女性）

時は７１年前、１９４５年7月１５日のことです。

その頃、私は北海道室蘭製鉄所の知利別町社宅で、父、母、兄と暮らしていました。

父は医者で、凡そ２キロメートル離れた隣町の中島町にある製鉄所（附属）病院へ出勤した後です。私は、母、兄と朝からの警報で防空壕に入っていました―と、――突然９時過ぎからドシン、グラグラと地の底を揺り動かさんばかりな不気味な大音響がしだしました。

社宅の飲料水汲み上げを調節している管理小屋のおじさんの叫び声がきこえます。

「艦砲射撃だぞ！！みんな避難しているぞ！！」私達は防空壕から出て、あたりを見廻した時、こちら側の社宅の人達が、向かいのラク山の麓へと逃げて行くのが見えました。また山の合間からみえるイタンキの浜に、何やら赤い火花が飛び散っています。それが何のことやら判らぬままに、とにかく避難することにしました。

しかし長靴で、野宿のできるようにと、着れる限りの衣服をまとい、さらに大きな荷物を背負った為、足が前に進みません。そのうちに水道管が破裂して道路が水浸しになってきました。

防衛団員の人の「さあ、早く早く」との誘導で、やっと山の麓の防空壕に入れてもらえました。そこには、「子供がおなかをすかせるといけないから」とお櫃を抱えこんでいるお母さん、枕だけを持ってきたおじさん、さまざまな人達が恐怖の中にいました。

少し落ち着いてきた頃、トンネル工事をしていた労務者風の若い人達が語りはじめました。「ラク山の頂上に登って休んでいたら、イタンキの浜の沖に、１１隻ほどの艦隊のような船が現れた。すると間もなく、一斉に日鋼方面に向って火をふき始めた。恐くて急いで山を降りてきたんだ。」

それがアメリカ艦隊による日鋼、日鉄の軍事工場、室蘭市街を標的とした艦砲射撃の一時間のはじまりだったのです。

後に室蘭製鉄所５０年史で知ったところ、米艦の１６インチ巨砲が打ちこんできた１トンの砲弾は、深さ数メートルの大穴をつくり、さく裂し、熱をもって焼けた鋼鉄の断片は鋭利な刃物と化し、うなりをたてて、あたり一面にとび散り、あらゆるものを切断し粉砕したと述べてありました。

父のいた中島町も、次から次へと地獄と化したのでした。丁度、中島町社宅の山の上に八丁平というところがあり、私達女学生、兄達中学生、一般の主婦達が毎日勤労動員をして、配属軍人の兵隊さんらとともに、山際を平にして、軍用機の滑走路づくりに励みました。１９４４年１１月３日にほぼ完成されたのです。そこから段々畑のように日鉄中島町社宅が建ち並び、さらにそれが広いバス道路へと、つながっていました。おそらく、アメリカの偵察機は、社宅を兵舎と、バス通りを滑走路と間違えたのではないでしょうか。

ある方の中島町の被害報告書には、次のように記されています。

「路上には次々と死体がころがり、それも首胴・手足・五体満足なのは殆どなく、肉塊が家の柱や壁に張りつき、特に中島町配給所に命中した、その時、その修羅場に吹き飛ばされた紙幣がヒラヒラと舞い上がり、曇空のもとで、何とも異様な不気味なコントラストをつくりだしていた」と。

その日には、父の生存もわからぬままに夜がふけました。翌日に病院、患者さんら、誰一人被害なし、父も元気でいるとの知らせがありました。

でも父は、警報解除された後、遺体をイタンキの浜の墓地の窪地に運び、薪で棚をつくり、木炭を敷き、その上に棺を二段積みかさねて火を放ち、油をかけながら百余名の野天火葬の任務につき、三日後に家に帰ってきました。被害は５７３戸が全・半壊し、砲弾は１３８発となっています。

知利別町は山かげにあり難をのがれましたが、前日まで、わが家からみえていた、日鉄工場名物の平炉の五本煙突の一本がないことに気がつきました。その場にあって、生きのびた方々にとっては、余りにも恐ろしい悪夢の、一日であったことでしょう。

私の心にも、大きな痛みが残りました。同じ級（くらす）で仲良しだった一人の友を失ったことです。輪西町の家の防空壕で直撃弾を受けてお母さん、小さな二人の妹さんと共に、一瞬にして１４歳の生命（いのち）を断たれたのでした。

それなのに、この身近に起こった悲劇は、残念ながら“昭和の記録”の書籍にすら記載されてありません。定かではありませんが、上からのお達しで、憲兵隊、警察は、警報団や隣保班を通じて、室蘭の実状を他地域の人たちに絶対にもらしてはならないと厳命したといわれています。

敗戦の一月前の忌まわしい出来事、悔やまれてなりません。

地球上から戦争がなくなり、世界に平和のくる日をひたすら念じます。

戦争体験談

小林　一雄（８０歳代　男性）

私は、昭和８年（１９３３年）生まれです。
日中１５年戦争、太平洋戦争が終わった昭和２０年（１９４５年）には、満１２才、国民学校（小学校）の６年生でした。

生まれた年に戦争が終わった子は別にして、昭和１９年（１９４４年）生まれで、戦争が終わった年に２才（アメリカ大空襲の事を覚えているという話を聞くことがある）までの子たちを、最後の“戦争体験者”と呼ぶことができます。

戦争が終わった昭和２０年の４月から、（旧制）中学校以上の学校はすべて休校になりました。中学１，２，３年生はみな、軍事工場に働きに行かされました。その年令の時、自ら志願して、陸軍幼年学校や、特別攻撃隊空年の予科練修生（七つボタンにいかりと桜）になった人たちもありました。その上の、（旧制）高等学校、大学生は、学徒出陣で戦地に赴いたのです。その上の人たちは、赤紙（召集令状）で、戦争に出かけたのです。これら、いくつかの人々の、それぞれのお話が聞けるといいと思います。“戦争体験の時代区分”はこのくらいにして、私のことをお話しようと思います。

私が国民学校３年生の頃、新兵で支那戦線に行っていた叔父が、マラリヤにかかって帰ってきました。その叔父からこんな話を聞いたのです。

「兵隊だけでなく、支那人なら誰でも捕虜にしたのです。その捕虜を柱にしばりつけ、新兵たちに、鉄砲の先に剣をつけ、それで支那兵を突き刺せと命令するのです。ワーッと剣付鉄砲をかざして突進するのですが、しばられた捕虜の顔を見ると、そのすさまじさに横に逸れると、やり直しを命ぜられるのです。５人ほど突き刺されると、出血多量で死んでしまいます。新兵に“殺人訓練”をさせたのです。」

その当時、支那人は“チャンコロ”と云って、日本人より下、いや、人間より下と思われていました。殺しても、どうということはない、という感覚です。

その時、私がどう思ったのかは、覚えていません。しかし、７０年以上もたった今でもその事は、あたかも自分がしたように、その情景が浮かんできます。

何年か前、この事を「心に刺さったトゲ」と題して一文を書き、友人に配った事があります。トゲは大きくなっても無くなることはありません。

国民学校５年生の時、学校ぐるみの集団疎開をしました。愛知県の、濃尾平野の北部、富士松村の見性寺というお寺です。（今の愛知教育大学の正門の下です。）

濃尾平野のまん中だったから、米の飯は、たらふく食べられました。おかずは、村

の野菜だけでなく、せり、みつば、つくし、さつまいもの茎（葉柄）、どじょう、たにしなど食べられるものは何でもとって食べました。

こんな子がいました。先生や友達と一緒に疎開したのですが、父母が恋しいと、次の日、一人で、名古屋の自分の家に逃げ帰った子もいたし、全員が遊びに行くふりをした、“歩調をとれ！”と云って隊列を組んでお寺の門を出て、逃げて行った子たちもいたのです。

ふろは一人、二人と、村の人たちの家に頼んで、入らせていただきました。

村の小学校に通っていましたが（疎開児童だけの教室）、小学校には兵隊たちも来ていて、蛇を殺し、料理して食べていました。

学校の帰りに、航空母艦から飛びたったアメリカの飛行機に機銃掃射を受け、道端の溝にとび込んでやりすごし、助かった事もありました。

その頃、父に赤紙（召集令状）が来て、軍隊にとられました。だが、１週間ほどで帰ってきたのです。家は食堂をしていて、近くの三菱の軍事工場に昼食、おかずなどを入れていたので、それを続けなさい、ということで軍隊から帰されたのです。

忘れられないのが、アメリカ軍による名古屋大空襲です。西の方、名古屋の空が、火と煙で燃えているのです。それを一晩中見ていました。時々、アメリカの爆撃機Ｂ２９が、照明弾を落としながら飛んで行くのも見ていました。この空襲で、私の家はすっかり燃えてしまいました。父母弟妹が身を寄せた親戚の家も、そのすぐあとの空襲で燃えてしまい、父は名古屋に残り、母と弟妹は、母の実家（岐阜県の東のはずれ）中津川市に疎開しました。

その後、三河地方で２度地震が起こり、住んでいたお寺が傾き、杉の大木２本で支え、私たちは、お寺の庭にむしろを敷き、三角のわら屋根の小屋に住んでいました。他のお寺で、この地震によって、鐘楼が倒れその下敷きになり、片脚を切断した女の子がいると、あとで聞きました。

お寺には住めないということで、また疎開しました。今度は岡崎市の東、Ｆ村という貧乏村でした。村がせまく、米がとれず、食事は貧弱になりました。顔が映るくらいの雑炊かおかゆでした。食べ終わっても元気が出ず、みんなお寺の本堂にゴロゴロと横になっていました。そんな食事でも、私は年中下痢をしていました。栄養失調だったと思います。戦争がもう半年続いていたら、栄養失調で死んでいたのではないかと思います。

不思議なことに、私が“代表”で医者へ行ったのです。診断は「運動不足」でした（！！）

その頃、浜松市に、アメリカの軍艦からの艦砲射撃のドーン、ドーンという音を、１回だけ聞きました。

忘れられないのは、根から「松根油」を取り飛行機の油にするといって、松の木を何本も切り倒し、その根を取った事です。その上、担任のK先生は、その根の切れ端をもらい、表面を磨いて物置の台を作っていた事です。戦争はどこへ行ったのでしょう。そんなことがありました。

昭和２０年８月１５日、玉音放送がよく聞きとれず、あとで先生から、戦争に負けて終わったのだと聞きましたが、その時、何の感想も浮かびませんでした。

戦後、何日かしてから、海軍が山の中に隠していたギャバジンの布を、上下の分、分けてもらいました。この年１１月２８日、名古屋に帰りました。あい変わらず食べ物が無く、ひもじい思いで日々を過したことは、忘れることのできない事です。

今でも、食べられるものを残すことは、罪悪だと思っています。友達と一緒に食事をする時、他の人のでも、残したものはみんな頂いて食べてしまいます。

まだまだたくさんの戦争時代の事が、忘れてはいけない事として、あります。

空襲体験談

横田　満男（８０歳代　男性）

今から７５年ほど前、私が小学生の頃、男の子の間で流行った遊びがあります。「スイライ・ボッカン」という遊びでした。スイライとは水と言う字と雷という字を組み合わせて水雷です。爆薬を容器に詰めてそれを水中で爆破させて艦船を攻撃する兵器のことです。ボッカンは航空母艦のことです。ジャンケンして勝つとスイライになります。負けた方はボッカンになります。そして、スイライがボッカンを追いかけます。追いかけて追い詰めて、スイライがボッカンに体当たりして終わり、という遊びでした。

こんな遊びをしていた私は１９３０年（昭和５年）に生まれました。翌年１９３１年には日本軍が満州事変を起こしました。１９３７年には盧溝橋事件が起こって日中戦争が本格化します。そして、１９４１年から太平洋戦争に突入して、１９４５年に敗戦となります。敗戦の時、私は１４歳でした。ですからこの１５年間を、私は軍国主義の日本で軍国少年として育ったわけです。そして、戦争中だからこその数々の体験をしました。

その中から今日は、米軍機に空襲された時のお話しをします。空襲の体験は二つあります。爆撃機の焼夷弾攻撃で家を焼かれたことと、戦闘機の攻撃のなかで危うく命拾いをしたことです。

私が生まれ育った所は八王子市です。その八王子市が１９４５年８月２日未明（敗戦の２週間前に）、米軍爆撃機Ｂ２９に焼夷弾攻撃を受けました。この攻撃でわが家は焼失して、一家で焼け出されてしまったのです。しかも、その後も八王子にはＰ５１という米軍戦闘機が飛来してきて、市民を銃撃したのです。そして私自身、場合によっては銃撃の的になっていたかもしれない、というお話です。

ただ、なにしろ、７０年以上も前のことで、私の記憶もおぼろげなところがあります。それで、八王子市が編纂した「八王子の空襲と戦災の記録」という資料で補いながらお話ししたいと思います。

このお話しに入る前に、みなさんの理解を深めて頂くため、二つのことについてざっと触れておきたいと思います。一つは、八王子市が焼夷弾攻撃されるまでに、日本本土がどのように米軍爆撃機に襲われていたのかということ。もう一つは、空襲に備えてどんな警報制度が実施されていたのか、ということです。これらについては、私

の記憶を各種の資料等で補ってお話しします。

日本本土が最初に米軍機の攻撃を受けたのは１９４２年４月１８日でした。この時は、Ｂ２５という爆撃機１６機が太平洋上の航空母艦から発進して、東京・川崎・横須賀・名古屋・神戸・四日市などを空襲しました。私が１１歳の時でした。

Ｂ２９が初めて本土を空襲したのは、私が１３歳の時１９４４年６月１５日でした。この時は、中国の成都基地から飛来したＢ２９が北九州を空襲しました。

その後米軍は１９４４年の７月から８月にかけて、マリアナ諸島のサイパン・テニアン・グアムを陥落させます。そしてそこに築いたマリアナ基地からＢ２９を発進させて、大規模な日本本土空襲を開始しました。その空襲の始まりが１９４４年１１月２４日、西荻窪の中島飛行機武蔵製作所の空襲でした。これ以後敗戦の時まで、東京は１００回以上空襲されたと言われています。中でも１９４５年３月１０日の、死者が１００，０００以上に上った東京大空襲、これはみなさんご存知と思います。この東京大空襲は、米軍が戦術を変えた初めての空襲方法だったのだそうです。それまで、Ｂ２９は昼間高高度から軍需工場・施設を精密爆撃していました。しかし、この攻撃があまり有効ではなかった。そこで、大都市に対して、夜間に低い高度から焼夷弾で無差別爆撃することにした。その第１回目がこの東京大空襲だった、と言われています。これ以後、東京、大阪、名古屋、神戸などの大都市が６月頃までに焼け野原にされます。そして、その後は地方の中小都市への徹底的な焼夷弾攻撃となりました。こうして、重要な軍事施設も工場もない中小都市が焼き払われていったのです。

では、次に空襲の時に発令される警報、防空警報と言っていましたが、について、触れておきます。防空警報は、警戒警報と空襲警報の２種類でした。警戒警報は、敵機が来襲するおそれがある場合に出されました。空襲警報は敵機が来襲する危険があり、空襲の危険が迫った時に出されました。

警報を発令するのは軍管区でした。軍管区というのは、当時の陸軍の各軍が管轄していた区域のことです。この辺は東部軍管区になっていました。この軍管区が発令した警報を、NHK のラジオ放送でアナウンサーが国民に伝えました。

警報伝達の実際を記憶をたどって再現してみます。ある日今まで聴いていた番組が突然ブザーで中断されます。そして、こんなアナウンスが割り込んできます。「東部軍管区情報。東部軍管区情報。関東地区警戒警報発令」続いて「東部軍管区情報。Ｂ２９らしき数編隊伊豆列島線に沿い北上中」これで番組が再開されます。でもすぐ中断されて今度は「東部軍管区情報。東部軍管区情報。関東地区空襲警報発令」続いて「東部軍管区情報。敵先頭目標伊豆列島に侵入」となります。ラジオで警報が出ると、市

役所がサイレンを鳴らして、市民に伝達します。警戒警報はウーという音を連続して鳴らします。空襲警報はこれをウー、ウー、ウー、というように断続しました。この音を私の脳が記憶し続けています。それで、小金井市のサイレンが鳴るたびに、今でも一瞬ビクッとします。

八王子を襲ったＢ２９は１８０機で、６７０，０００個の焼夷弾を投下しました。この攻撃で、市街地の８０％が焼失しました。この時わが家は今の国道２０号線（甲州街道）沿いにありました。桶職人だった父親が店を構えていたのです。市街地の一角にありました。一家は７人で、両親と長男の私と４人の妹という家族構成でした。私は旧制東京府立第二中学校ー今の都立立川高校ーの２年生で、１４歳でした。もっとも、この頃は学徒勤労動員という制度の下で、学校には行かないで、火薬工場で働いていましたが。

八王子市の空襲には、幾つか特徴があるのですが、一つ特に目立った特徴があります。それは何かと言いますと、空襲を予告するビラが事前に空から撒かれたことです。このビラは、表に「日本国民に告ぐ」という題で文章が書いてあり、裏には焼夷弾を投下しているＢ２９の編隊の写真、それに、これから攻撃する１２の都市の名前が書いてありました。その中に八王子も入っていました。

表の文章は、要約すると「これから裏に書いてある都市を爆撃するが、人道主義のアメリカは罪のない人を傷つけたくない。アメリカの敵はあなたがたではなく、日本の軍部だ。だからあなたがたは、今のうちに避難しなさい」という内容でした。このビラが、７月２７日と３１日それに８月１日にも撒かれたといわれています。

８月１日は、このビラが撒かれたうえ、国道２０号線にあったわが家の近くに消防車が配備されました。東京からも応援の消防車が来ていました。それに加えて、今夜やられるという噂が隣近所から聞こえてきました。そこで、わが家では、空襲の時の対処の仕方をとりきめました。それは、警防団員だった父親は踏みとどまって家の消火にあたる、私は末の妹（５歳）を自転車の荷台に乗せて八王子を脱出して、父親の友人宅へ避難する、そしてほかの家族、母親と小学生の妹達３人は連れだって裏の川原（浅川）に避難する、ということでした。

父親が団員だった警防団ですが、警防団は、１９３９年にできた防空を目的にした団体です。そして、警防団員には、防空訓練や、空襲の時の灯火管制・消火・避難・救護などで市民を指導する、という任務がありました。それで父親は避難せず踏みとどまることになったのです。また、当時は防空演習といって、一般住民が空襲に備える訓練をやっていました。バケツリレーや火叩きで消火する訓練でした。そして空襲

の時は、家族が自力で防火・消火にあたる義務があったのです。でも、わが家では父親以外は逃げることにしたのです。

結果論ですが、これは正解でした。国道２０号線のわが家があった一帯は、大量の焼夷弾投下で大火災を起こしたのでした。逃げ遅れた市民や応援に来た東京の消防団員の方々が犠牲になりました。

８月１日午後８時５５分、何時でも外に飛び出せる服装でいた私たちの耳にいきなり空襲警報が鳴り響きました。さあ来た、と表に飛び出しました。しかし、この警報はまもなく解除されました。それで、もう空襲はないと思って家に入ろうとしました。その時です。突然南西の方角の空中に、強烈に光る物がフワッと浮かんだのです。そして、その辺り一帯を猛烈に照らし始めました。灯火管制で真っ暗な街の一角が、まるで真昼のように照らし出されたのです。照明弾でした。怖さを忘れて見とれていた私たちの耳に、同じ方角の空中からザザーッという、雨が降るような音が聞こえてきました。そして物凄い爆発音とともに真っ赤な火の手が上がりました。焼夷弾の第１弾が投下されたのです。

私たちは父親を残して、まず母親と３人の妹が浅川をめざして出て行きました。次に、私が自転車の荷台に末の妹を乗せて、国道２０号線を東に向けて走り出します。次の焼夷弾が頭の上に落ちてくるかも知れない、という恐怖感から、必死にペダルを踏みました。家から２００メートルぐらい離れた時でした。行く先に向けてあのザザーッという音が聞こえてきたのです。第２弾の投下だと思いました。とっさに自転車を放り出して、妹の手を引きながら走って、浅川を目指しました。振り返ると、第２弾が落ちた辺りに真っ赤な火の手が上がっていました。途中で、防火用水（当時は道端に防火用の水がコンクリートの容器に入れて置いてありました）の水を妹の頭からかけ、私自身もかぶりました。その時でした。一団の人たちが私たちの傍を通り過ぎました。みんな一様に頭から布団や毛布を被っています。そして、大きなうめき声を上げていました。怖さで声を出さずにいられなかったのでしょう。

二人は、どこをどう走ったのか、気が付いたら浅川の河原にいました。そこは、避難してきた人たちでごったがえしていました。そして、不思議なことが起きました。あの雑踏のなかで、母親と妹たちに会えたのです。

私たちは一塊りとなってうずくまりました。見上げれば手が届きそうな超低空から、巨大な機体のＢ２９が続々侵入してきます。そのうち、誰かが「ここには爆弾が落とされるぞ」と叫びました。この声で私たちは、川原の北にある裏山をめざして走りました。途中に流れがあります。そこを渡りました。今でも覚えていますが、私の右横

を犬が一匹、泳いで渡っていました。

こうして私たちは裏山の麓にたどり着きました。すると、バリバリーッという物凄い音がしてきました。空からの機銃掃射でした。ここにもいられない、またそこを離れました。そしてあてどもなく歩きました。ふと気が付くと、Ｂ２９の爆音も、焼夷弾の落下音も消えていました。空襲は終わったのです。８月２日午前２時２９分だったそうです。市街地を見下ろすと、広い範囲が火の海でした。

夜が明けるのを待って、わが家を目指しました。残った父親の安否が気遣われました。大和田橋という橋を渡ってしばらく歩き、市街地に足を踏み入れました。そこで目にしたもの、それは生れて初めて見る光景でした。軒を連ねていた店や家がなくなっていて、むき出しの焼け野原になっていました。あちこちに電線が垂れ下がり、焼けトタンが散乱していました。そして物凄い悪臭がしていました。こんな光景の中を歩いて、わが家のあった辺りに辿り着きました。そこは特にひどい焼け野原でした。その一角に、男の人がうずくまっていました。近づいてみると、父親でした。みんなで喜び合いました。聞けば、父親は、これはとても消せないと消火をあきらめて、大和田橋の下に避難したのだそうです。

私たち一家はこうして全員無事でした。けれども、市民３９６人が亡くなり、約２，０００人が負傷したそうです。近所にも犠牲者が出ました。わが家のすぐ裏に住んでおられた６０代のご夫婦でした。防空壕の中で窒息死なさったのです。二人寄り添うようにして亡くなっておられました。また、近くの路上で、焼け焦げた消防車にもたれて、消防士の方が亡くなっておられました。Ｂ２９による八王子の焼夷弾攻撃のお話しはここまでです。

次は米軍戦闘機Ｐ５１に襲われたことをお話しします。Ｐ５１というのは長距離戦闘機で沖縄の基地から発進して日本を襲っていました。Ｐ５１が初めて八王子を襲ったのは、１９４４年５月２５日でした。それ以後頻繁に襲ってきていました。そして、市民を銃撃したり、爆弾を投下したり、宣伝ビラを撒いたりしました。

このＰ５１が、あの８月２日に八王子市に飛来して、追い打ちをかけるようにあちこちで銃撃をしました。Ｐ５１の攻撃は８月１３日まで続いたそうです。

もうあの頃の日本には、飛行機による迎撃も高射砲による対空砲火もほとんどなかったと思います。だから、Ｐ５１は八王子の空をわがもの顔で飛び回っていました。

ある日、私が配給になった梅干を入れたバケツを持って帰る途中のことでした。爆音がしてＰ５１が急降下してきました。辺りは焼け野原で隠れる所などありません。とっさに地面にへばりつきました。でも、このパイロットは私を銃撃しないで、宣伝

ビラを撒いて飛び去っていきました。

　これで私の空襲体験談は終わりです。

戦争体験談

田中　利徳　（８０歳代　男性）

前置き。私は８９歳でふれあいの里に介護療養期間中は市報の便りは目を通すこともなかった。平成２７年１１月１０日にやっと許可を得まして９ヶ月に達し、やっと我が家に住まれるに至り、今後市内のデイサービスてのひらでのリハビリに特訓する現在です。

さて本題は戦争体験談の記事が目に飛び込んできました。早速、老いても過去の事は良く覚えております。

正規の年齢に達しないまま志願にて昭和１８年陸海相方の応募についていささか甲種合格なれど陸軍志望しつつもいかにせん肩下がりの為、海軍に編入とのこと。

気持ちは動揺しましたが、行くべき道は二つしかないと腹を決め早くも令状が届く。１月１０日出陣でした。

横須賀海軍運航部で昼食弁当が渡され歩くこと４ｋｍ。海軍大津射撃場にて食事をとる。又遥か４ｋｍに至った久里浜、そこが海軍工学校の母校でもあったいわゆる海兵団、全く相違いがある。誰も病棟にならぬことが一番の先決でした。いわゆる年月に依って進級制度であり、病気したらベット生活、月数によって進級が遅れるシステムを前置きされたのであります。私は十八期工作金工科に属し、学校に要請に依って出向命令で、早くも武蔵野三鷹の中島飛行機や数月後青戸ひかり自転車（軍需工場）に派遣され、十八期卒業には先延しされました。一連の卒業期には相模野第一航空隊へバトンタッチ状態でした。早くも状況が悪化。戦時の命称に切替わりいわば暗号と称するに至った。ウ七一五部隊にて内外共にはげしくなった厚木飛行場には出陣。帰還は相互に飛行機の修理にもたちさわった。いわゆる波状攻撃を受け帰還の有様。なんせ飛行機が足りず、尚兵舎が一棟おきに焼い弾の降下の恐れからこわされた。予科練の一行は、防空ごう堀りは毎日、他分隊の分まで掘り続けたのであります。分隊毎に入浴の際、頭に石鹸箱を頭にしばり其の儘入浴するやいなや入りました、出ましたの何の為の入浴か分かりません。それが整備兵の分隊でした。

私達工作科分隊の一部員は、茨城県内の松林に分散飛行機の修理に当る。月日が経つにつれ８月１５日午前の部、練兵場に将校対兵卒とのこぜり合い、暴動に走る、切り込み作戦。私達の分隊士が負傷をよぎなくされ入院となる。その看護にたずさわった。玉音放送が流れ、何事にも米軍に従うしかなかった。早くもマッカーサーが厚木飛行場に降り、兵舎を３日半に渡り明渡しの命令で、将校及び復役補充兵は其の日は

解散。各自憲章をはぎ取り我が家へ帰る。私達工作科分隊は一部、愛知県内の航空隊が空け渡しに入居。要は残務整理として数人が残留となり、全員三日半の休暇を頂き我が家へ。休暇明け９月１４日全員解散。二度目の我が家へ。市役所への復員での住所届け済みを済ませた。

前文に書き残したことがあります。ウ七一五部隊が解散するや部隊周辺の朝鮮民族がリヤカーにて没収に輪をつくった。大変な人出でした。

職もなく市街地は焼野原。しかし鉄道は電車が走っていた。まず母校（工作学校）を拝見しつつ、其の儘の原形でした。その前の通信学校も無事でした。壁に貼紙を見るや邦人と元兵員の帰還船乗組員を募集。又は機雷掃海にたずさわる人一般員として募集に応募した。

推定機雷浮接２５００ヶとのこと。金華山沖ではすでに網が切られるトップニュース、新聞に載せつつ、戦時海防艦神津八代の千屯級が無事でしたので掃海艦に振い向け後続小型船４隻がくわわる。漁業関係者は何事にもホットした事と思う。

いつしか胸をなで降ろした。遠征に出港出来た、あたたかみが沸いていると察します。

我等も慰労金を頂き解散となる。

以上

◎　機雷掃海は北海道宗谷海峡一帯ＡＭ７：００～ＰＭ５：００まで

集団学童疎開の経験

浅野　幸雄（８０歳代　男性）

アメリカとの戦争が激しくなり、東京も空襲される恐れが強くなりました。

私は小学生の頃は目黒区に住んでいました。昭和１９年に、月光原小学校の学童疎開に参加し、山梨県の甲府市に、甲府も空襲されるというので、その２週間前に、穂積村ー今の富士川町穂積地区に再疎開しました。そして、そこで終戦を迎え昭和２０年１０月に帰京しました。

この「学童疎開の記録・月光原小学校編」には、当時の学校の公文書、学童、父母、友人、知人のハガキ、戦後に疎開についての思い出を語る座談会が行われたその記録や、学童、先生、父兄の思い出を綴った文章が載せられています。

月光原小学校の学童疎開が、どのようなものだったかをまとめた本です。この本は１９６０年7月３０日未來社から出版された本ですが、今は絶版になっています。

そして、この本を基に、「みんなわが子」と云う映画が作られました。ＤＶＤになって今も売られています。

脚本は植草圭之助、監督は家城己代治さんで、独立プロ全農映で作られました。

この二つは、月光原小学校の学童疎開を全面的にとらえられていて、今私が読みかえしてみると他の寮ではそんなことがあったのか､疎開児がそんな気持ちだったのか、親たちも戦争を勝ち抜くためにとの思いで、子供たちを励ましていたんだと云うことがわかりました。

映画「みんなわが子」については市でぜひ上映の機会を作って頂きたいと思います。

さて、これからは私の学童疎開の体験、思い出をお話したいと思います。

私の家では頼る親戚がなかったので、妹と二人学縁故疎開でなく、学童集団疎開に参加することになりました。

月光原小学校は山梨県の甲府市に疎開しました。昭和１９年の８月でした。

甲府市内は、東京のような戦時中の緊迫感、防空訓練もなく、防空壕もありませんでした。私たちは甲府市内の旅館や料亭など１６カ所に、町内会ごとに別れ、学校は学年毎に市内の小学校に通っていました。

私は竹屋旅館で生活をしていましたが、この旅館には、甲府に疎開して来た陸軍学校の将校さんが三人分宿することになりました。

その将校さんには、お肉が配給されましたが、将校さんは、宿の調理に頼まず、寮

母さんに渡してくれました。寮母さんはその肉を使ってカレーを作ったりして、将校さんと夕食会を度々しました。

甲府も空襲の危険が迫り、私たちは再疎開をすることになりましたが、その時私は日の丸の手拭に、お別れの記念の言葉を書いてもらいました。

その一人、水乃谷少佐は「戦況急なり、我は征かん、幼き友の後に続くを信じて」と書いて頂きました。

幼き友を守るためでなく、幼いあなたたちが、私たちの後につづいて敵と戦ってくれることを信じて、だからこそ戦地に征けると云う意味に今解釈をすると戦争に出かけるときのその心情に感無量の思いがあります。

「葉隠に曰く、武士道とは死ぬことと見えたり」

「誠実」二人の将校さんは、こう言葉を残しました。

死と向き合った人の言葉を切々たる思いで感じています。

甲府での生活は、少しづつ戦時色が濃くなって来ましたが、そう急な変化はありませんでした。

婦人会の皆さんが、一日里親と云って、私たちを家に招いて、お菓子を食べさせてくれました。

皇后陛下から疎開学童に恩賜のお菓子をもらった時には、一日里親になってくれた家におすそわけをしました。

つぎの代をせおうべき身ぞたくましく

正しくのびよ里にうつりて

この御歌を拝誦を繰り返して涙を流した先生もいた。

陸軍の将校による閲童式が行われたことがある。月光原小学校の学童が伊勢小学校に集められ、分列行進をした。

この時、私は行進の先頭に立ち「歩調とれ！」「右向け右！」「敬礼！」の掛声を校庭いっぱいに響かせた。

この頃の私は軍国少年であった。

甲府が空襲される２週間前に、私たちは穂積村へ再疎開しました。

穂積村は今は、富士川町穂積地区で、身延線の鰍沢口から国道５２号を横切り車で１５分程で、この地域の入口にたどりつきます。

このような山里なので、診療所もないため病弱な子供たちは、甲府でも西の郊外にあった遠光寺寮に置いていくことになりました。先生方の配慮も空しく、甲府は大空襲を受け、焼きつくされ、この空襲で学童２名が焼夷弾の直撃で即死、学童一人と学

寮長一人が、全身に火傷の重傷を負いました。

私たちは、そのようなことになっていたとは知らず、甲府盆地を見下ろす山の上のお寺の寮の庭で、釜の中で湯がたぎる様に、火のほのおをたぎらせている甲府を茫然と見ていました。

この甲府の犠牲者は、もう一人いました。火傷をした二人が入院した病院に、寮母さんが交代で看病に行っていた、山田寮母さんが病院で流行っていたチフスに感染して亡くなられたことです。

寮母さんには身寄りもなく、見守る人もなく亡くなられたとか、大変お気の毒なことでした。

全身火傷を負った遠峯英雄さんは、手記で次のように述べています。

「私はいまこんなみにくいからだになっている。眼のまわりから左のほほのやけどのあと首すじから全身にかけて引きつっている皮膚のみにくさ、左足は永久に曲がらないし、ふとることもなくやせ細っている。南巨摩郡鰍沢町の秋山病院に運ばれた。毎のほうたいかえはたまらなかった。うみが出てほうたいにつき、ひりひりとする。それが体一面だからやりきれない。今考えてもぞっとするくらいだ。

戦争中はそれでも気が張っていた。「勝つまではがんばれ」、それが戦争に負けてからは「可哀相だ。運がなかったのだ。」

大人は勝手なものだ。このたまらない気持ちのはけ口をやっと動く手で爆発させた。尿のビンをひっくり返したり手のとどくかぎり何でも投げつけた。看病の先生やお母さんを困らせたものだ。

（療養が終わって）

鏡を見ると左はやけどのあとで赤くもり上り「お岩さん」そのものでたまらない気持だった。家の人々の心配でこの体でもできる仕事をさがしてもらった。手に職をつけようと、お菓子屋さんを選んだ。パンを焼く重労働にはとても耐えられないので…生菓子に転向した。

私のいじけた気持ちも仕事に打ちこむ中で、少し変ったろうか。

戦争は二度とくりかえしてはならない。学童疎開も完全に私たちを守りぬくことができなかったでないか。

私は和菓子の技術者として生きてゆく。いじけたり、傷あとを気にしてばかりもいられない。あきらめの心も出てきたのだろう。」

以上は、遠峯さんの手記からのほんの少し抜粋したものです。

彼は「あきらめの心」と云っていますが、私は傷にまけず、人目を気にせずに生き

て行こうとする気持ちの現われと、尊敬します。

さて、穂積村に移ってからの生活は、食糧不足を少しでも自分達の手で補わなければなりませんでした。寮であるお寺の側の沢の蟹は、一日で食べつくし、ヘビも皮をむいて火にあぶって食べました。背丈を超える蕗を山に入って取って来て、お米の中に入れて食べました。青年団の人達が、いっぱい持って来てくれたときは、大変ありがたく思いました。

寮長の先生とお鍋を持って農家に、味噌やしょうゆをもらい歩きました。

畑の草取りをして、そのごほうびに、ふかしたさつま芋をもらい、あぜで食べたりしました。

山に来て怖かったことは、寮長先生と山を下りてさつま芋を買出しに行ったときのことです。突然爆音と共にバリバリと云う音がして体のわきに、ぬうように土がはね上りました。上を見るとグラマンが、操縦士の顔が見えるほどの低空飛行をして機銃掃射をしていったのです。とっさにさつま芋畑に飛びこみ身をふせましたが、運が悪ければ命はなくなっていたことでしょう。

昭和２０年８月１５日、穂積校の校庭で、全生徒が集められ、玉音放送を聞きましたが音が悪く、声もはっきりせず何を云っているのかわかりませんでしたが、先生方の態度で、日本が戦争に負けたことを感じました。

昭和２０年１０月２５日、校舎のない校庭で、解散式を行い、それぞれの家へ帰っていった。

私の家は幸に焼けなかったので、家につくと、畳にふとん敷き、午前中いっぱいぐっすりと寝たことを覚えています。

長崎での原爆体験（戦後７０年を振り返る）

畑島　喜久生（８０歳代　男性）

今わの際(きわ)近くに来て願っていること

原爆被爆後の自分の体から蛆虫が湧きでる
という６６年前の遠い記憶を通して
いま福島原発事故の情報に接していると
白血病への畏怖はそのまま蘇って生々しくさえある

わたしはいま２０１１年３月から
原爆症認定者です
８０歳過ぎの命を血税の扶けを借りて生き永らえるという
ときにいま　果たして

そこでの余命はどれだけのこっているか

被爆し火傷に侵された自分の肉体から湧いてでる蛆虫を見ていても
さして心がうごくというのでもなく
だから
絶望的な窮地のなかでも泣いたことはなかったし
だいいち動くべき感情そのものが既に枯渇し果てていた　だからそのときには
尽きかけている命に思いを致すことすらなかった
ということになる

そしていま
その後の６６年間の命を連ね
この度の東日本の大震災に出合って思う―
あのときの被爆とはいったいなんだったのか
そしていま
一度放射能に曝(さら)されたことのある

「肉体(からだ)」とその「精神(こころ)」とは
放射能による周囲の汚染に　果たして
鈍感なのか　それとも
敏感なのか―――
ただ　はっきり分かっていることは
あのときの蛆虫の記憶は
６６年経ってもいまなお鮮烈で
少しも古びている気配などなく
いちど滅び去ってしまった国家(クニ)のうえをも這いずりまわっていて

もとより
わたしの意識のなかでのこととしてではあるが
そして
いまこの期(ご)に及んで
自分の命のことなど所詮は“他者なる未来”のもの　と半分悟達しかけの思いのなかにいて
なおその心は　深い肉体(からだ)のずっと奥処(おくみ)にあって
もとより周り中の誰とも繋がっていなくて
ああ
……と　あのときの蛆虫はあのときの放射能とどのように結びついていたのか―――
いま　わたしが
今わの際近く
このとし齢になって
それを知りたい！！
と願っていたりもし……

戦争体験談集

発　行　平成２８年３月３１日
　　小金井市

編　集　小金井市企画財政部広報秘書課広聴係
　　小金井市本町六丁目６番３号
　　☎０４２－３８７－９８１８

再生紙を使用しています。